

2012年10月6日(土)

14:00～15:30

富山県民会館 304号室

「縄文時代の装身具と翡翠」

講師 元 富山市埋蔵文化財センター所長

藤田 富士夫 氏

本日は、日本海文化を象徴する縄文前期の玦飾(けつかざり)文化と、縄文中期の翡翠(ひすい)文化を概観したい。今から4000～6000年前に北陸を中心として栄えたこれら二つを見ることで、縄文時代の装身具の文化が8～9割かた見えてくる。



1. 縄文時代の装身具の変遷

お手元の資料集に、富山県埋蔵センター発行の『ひすい』(1987年)から縄文時代の装身具の分類表を引用した【第1-1図】。

玦飾(≡玦状耳飾)というのは、縄文前期(5000～6000年前)に見られるCの字形の遺物でドーナツの一部を切ったような形をしたものである。他の装身具では、勾玉(まがたま)や三角形の形をしたもの、管玉(くだたま)のような形をしたものもある。これらはすべて滑石(かっせき)や蠟石(ろうせき)といった軟らかい石で作られているが、その

原石は長野県北部の大町市から富山県朝日町に広がる白馬岳連峰やその山麓で採れる。このことから、最初にその周辺にこれらの装身具を作る集団が誕生したと思われる。

縄文時代中期（4000～5000年前）になると玦飾の形が変化して長くなり、馬場山G遺跡のように昔の日本鋏（ばさみ）のようなものが現れる。ほかには、孔を開けて首からぶら下げるペンダント状のものが宇奈月の下山新遺跡や立山町の二ツ塚遺跡から出ている。一方、縄文中期は縄文文化が一番栄えた時期で、さまざまな翡翠の装身具が作られた。翡翠の加工はこの時期の大きな特徴である。氷見市の朝日貝塚出土の翡翠の硬玉製大珠は長さが15.9 cmの大きなものである。朝日町の境A遺跡はそれらの加工遺跡で、ダイヤモンドのような形をした特徴的な翡翠の大珠を製作している。翡翠の原産地は新潟県の姫川上流に広く分布しており小滝川や、山を挟んだ隣の青海川上流の橋立地区にもある。河川の転石となって富山湾へと流れ出た翡翠は、やがて漂石となって海岸へと打ち上げられる。朝日町の宮崎海岸では今も翡翠を拾うことができる。縄文時代の人たちも、こうした海岸で翡翠を拾い、加工して全国に広めたと思われる。

縄文時代後・晩期（2300～4000年前）にも翡翠の玉は作られるが、この時代のものは数珠玉ぐらいの大きさで、たくさん作ってネックレスにしていたようだ。ほかにも富山市の布尻、黒部市の愛本新、上市町の丸山Aという遺跡からは、軟らかい石で作った装身具等が出てくる。一部、境A遺跡などからは翡翠で作られた装身具が出てくるが、中期のような大型の翡翠製品は消滅している。

【第2図】は、縄文時代装身のイメージ図である。

右側の人物は縄文前期の人をイメージしており、頭に漆を塗った櫛（福井県鳥浜貝塚で出土例あり）や髪を束ねる棒状の装身具を挿し、首には貝殻や小石で作ったネックレスに、

狼や猪の牙に孔を穿けたペンダントをぶら下げている。また、耳たぶに孔を穿けてC字型の玦飾を付けている。これが、現在の縄文前期の装身に関する学問的な到達点である。

左側の人物は、縄文中期から後・晩期の人をイメージしている。やはり頭には櫛状の装身具を着けており、耳たぶには土で作った焼き物である耳栓(じせん)をはめ込んでいる。今も東南アジアやアフリカの民族の中には同じような耳飾りを着けている人たちがいるし、私が中国を旅行したときにも昆明の少数民族のおばあちゃんが同じようなものを着けていた。子供のころに耳たぶに孔を開けて小さなのはめ込んで、馴染んでくるとだんだん大きなものと取り換えて行く。耳たぶが伸びて、大きくなっている人ほど、より尊敬され美人であるということで、一種のステータスシンボルになっていたようだ。そして、首にはやはりネックレスをかけて、そこに翡翠の大きな玉のペンダントを着けていたと思われる。1個の大きな玉、それが「親玉」の語源である。そして手には動物の角などで作った象徴的な装身具を持ち、腕には腕輪をはめて、腰にもやはり動物の骨で作った装身具をぶら下げている。

今日は、そのような縄文装身の中でも、特に縄文前期の人が耳たぶに着けていたとされる玦飾と、縄文中期の人が胸にぶら下げている翡翠の大珠を取り上げてお話したい。

2. 玉・石環から玦状耳飾へ

玦飾は、明治30(1897)年に神奈川県の諸磯貝塚から出土したものが「玉」と報告されたのが最初で、明治44(1911)年には「石環」といった名前で研究された。当時、古墳を発掘すると金環や銀環が出てきており、それを念頭に置いた命名であった。しかし、大正時代になって、近代考古学の手法をヨーロッパから導入した京都帝国大学の濱田耕作先生が、清国で1898年に出版された『古玉圖攷』(図鑑のようなもの)に描かれている「玦

と類似性があると新聞記事で指摘した。1915（大正5）年のことである。その翌年に藤井寺市の国府（こう）遺跡の発掘調査が行われたが、それに関連して述べられた。『古玉圖攷』に示された「玦」は、一つの面には2匹の龍を描き、もう一面には1匹の朱雀を彫刻した装飾性の強いものである。そこには中国最古の字書である後漢の『説文解字』が引用されており、「玦は佩玉（はいぎょく）なり」とみえる。佩玉とは腰に付ける飾り物である。あわせて「玦は環のごとくして、缺（か）けるところあり」と形についても記してある。それは「石環」の形そのものであった。この図書を、濱田先生はご存知だったのである。

濱田先生の学問的アドバイスがあり、それらを受けて大阪毎日新聞社の社主であった本山彦一氏がスポンサーとなり、大阪医科大学解剖学教室の大串菊太郎教授によって1917～18年に国府遺跡の発掘調査が実施された。そこで発掘された計36体（その後の発掘で今では計90体に及んでいる）の人骨中6体から一対となって「石環」が出土し、それが人骨の両耳の部分から出たということで、これは“耳飾”だと発表された。これにより、それまで石環と呼ばれていたものの耳飾用途が確定した。その後、玦様の耳飾、耳飾石環、耳環など様々な名称で呼ばれたが、1922年に梅原末治先生が「玦状耳飾」という学術用語を与え、それが現在の考古学名称となっている。

3. 玦状耳飾 (Slit earring) から玦飾 (Slit ring) へ

その後、神奈川県上浜田遺跡の土壌からも同じような遺物が2個一対で発見されたことなどから、「玦状耳飾」の名称や用途はゆるぎないものとなった。このような動勢のなか、私は東アジア諸国の「玦」を見ていて、この遺物を耳飾用途に限定したのでは、理解できないものがあることに気付いた。つまり、東アジアにも同様の形をした装飾物、つまり「玦」

があり、その中には死者の眼窩に嵌めたものや、紐をつけてペンダントにしたものもある。玦状耳飾を英語に訳すと Slit earring となるが、私は取りあえずこの形状のものを玦飾 (Slit ring) と呼ぶことにして耳飾りという限定を外し、検討を始めることにした。

【第 5 図】は、私が物心ついた小学校 5 年生以降拾い集めた玦飾である。それ以前に幼稚園時代から拾っていたものの多くは研究者に渡してしまったのだが、一番上の列を見ると、最初に円盤状のものを作って丁寧に磨いた後、真ん中に穴を開けて、その一端にスリットを入れるという製作工程がよく分かる。ほかにも、勾玉のような形をしたものやその未成品が非常にたくさん出ている。こういったものが出土する上市町の極楽寺遺跡は、装身具を作る攻玉遺跡であったことを示している。

日本全国の玦飾を製作した攻玉遺跡の分布を示したのが、【第 6 図】である。●印は縄文早期末葉～前期初頭の遺跡で、■印が前期中～後葉の遺跡である。●印が古い遺跡で、石川県能登半島の甲・小寺遺跡や上市町の極楽寺遺跡、朝日町の明日 A 遺跡、新潟県の川倉遺跡などでみられる。こういった遺跡で、滑石や蠟石を使って玦飾を作っていたのである。時代が下ると、攻玉遺跡が姫川上流の大町市や松本市辺りに集中する。言い換えれば、滑石や蠟石の原産地である白馬岳の麓に人々が集まっていったということだろう。

玦飾は、日本列島だけに見られるものではない。中国東北部・内モンゴルの興隆窪（こうりゅうわ）文化、中国江南の河姆渡（かぼと）文化でも盛んに作られている。興隆窪文化は今から 7000～8000 年前の中国新石器時代前期の文化で、河姆渡文化は今から 6000～7000 年前に中国長江下流域の江南に栄えた文化である。年代の古さと、日本列島では初期には海岸部にこのような文化が展開していることから、日本の玦飾文化は中国の興隆窪文化や河姆渡文化の影響を受けて展開したと考えられる。

日本列島で一番古い瑛飾は、7000年前ぐらいのものである。神奈川県の上浜田遺跡で出土したもので、この時代の特徴は切れ目が1~2mmと非常に狭いことである。また、色もきれいで、貴重であつたらしく壊れたものを補修用の孔を開けて、つないで再生している。

ここで幾つかの疑問点が生じてくる。耳飾説に従えば、一つは、スリットが1~2mmしかないものが耳たぶに穿けた孔にはまるかどうかである。もう一つは、確かに壊れたものをつなぐには2つ孔を穿ければ良いのだが、その横にもう1つ小さな孔がみられる。それは何なのか。この小孔の穿け方は、補修孔のそれとは雰囲気異なる。その小孔には紐が通されて、ペンダントのようにぶら下げて用いた可能性があると思う。私が瑛飾=耳飾説に真っ先に疑問を持ったのがこの資料なのだが、ほかにも何例か耳飾として両耳を飾っていたとするには疑問が残るものがある。先に紹介した国府遺跡の出土状態にも、必ずしも耳飾に特化出来ないものを含んでいる。日本考古学で大正時代から瑛飾が耳飾だということが定説化されているが、それは全くの思い込み過ぎないと私は思っている。

もう1点、瑛飾の機能を紹介しておきたい。縄文早期末葉の神奈川県の上浜田遺跡からは1つの土壙から2個同じような瑛飾が出ているが、縄文時代前期中葉の大阪府の国府遺跡の段階になってくると、1つの土壙から、違う形のものが2個出てくるようになる。これは2個一対ではあるが、1個を交換し合った結果とみた方が良いのではないだろうか。また、1つの土壙から1個だけしか出てこない場合もある。1個を他の人に渡したからだと思う。同じような事例は、中国の内蒙古の興隆窪遺跡や江南の馬家浜文化でもみられる。

東アジアを視野に入れて瑛飾をみると、いずれの地域においても「贈与交換」の貴重品として扱われていたことが分かる。瑛飾は東アジア的視点からの検討が欠かせない遺物である。

4. 翡翠装身のはじまりと展開

【第 10 図】は、糸魚川市教育委員会の木島勉氏が作成した縄文時代の翡翠玉の製作遺跡の分布図である。左側が富山県、右側が新潟県で、富山県側から境川、青海川、姫川、早川、能生川が流れていて、朝日町の境川から糸魚川市の早川にかけて翡翠玉の製作遺跡が点在している。翡翠の攻玉（加工）文化が展開していたのは、日本列島でもこの地域だけである。

また、先ほどの瑛飾の攻玉遺跡の分布図と見比べると、翡翠の攻玉文化が栄えたのと同じ地域に、前段階に軟らかい滑石や蠟石で装身具を作る文化が栄えていたことが分かる。それをベースとして、この地域の人々が翡翠攻玉の文化を作り上げていったのであろう。

また、当然のことながら翡翠の原産地があることが、翡翠の文化が栄えた大きな要因である。主な原産地は姫川上流の小滝川と、青海川の橋立地区にある。翡翠は現在、高価な宝石となっているが、昭和 42 年に私が大学生になったばかりのころ、朝日町の浜山玉作遺跡で発掘調査をしていたとき見学に来られた近所の方が「そんな石なら屋根の重石に使っている」とか、「漬物石に使っている」とおっしゃっていた。翡翠の比重は 3.0～3.3 と、他の石に比べて重い。重石とするには適当な石である。ついこの間まで、今日ほど翡翠への関心がなかった。また、硬度が 6.5～7.0 もある非常に硬い。私達が昔使っていたキックアスナイフは硬度 5 である。翡翠はナイフを寄せ付けない硬さをもっている。

このような翡翠を縄文人は装身具に加工していた。弥生時代や古墳時代には勾玉の素材となり珍重されていた。それが飛鳥時代になると使われなくなった。その理由について、翡翠の緑色をガラスが代用できるようになったからだと言う人がいる。あるいは、翡翠の玉で身分を表していた貴族社会に代わって、律令国家は法律で身分を明快に示すことがで

きるようになったからだという説もある。理由は定かではないが、今日までの長い間、翡翠は忘れ去られてしまった。新たに発見されたのは、昭和 13 年のことである。それまでは、遺跡から翡翠製品（勾玉や大珠）が出土しても、ビルマや中国の雲南省から伝わったものとされてきた。

列島での原産地再発見のきっかけを作ったのは糸魚川出身の抒情詩人、相馬御風である。御風は、『古事記』の神話に出てくる沼河比売^{ぬまかはひめ}さまが翡翠の勾玉を首から下げていたとすれば、それは糸魚川を流れる姫川（「沼河比売」の名にちなんで付けられた）で採れた翡翠かもしれないと思い立ち、当時、姫川の発電所の所長をされていた鎌上氏に話された。鎌上氏は長女の義父であった伊藤栄蔵氏に探索を依頼し、伊藤氏が姫川の支流である小滝川で、青い大岩を発見した。実際のところ伊藤氏はそれを翡翠だとは思っていなかったが、翌年（昭和 14 年）東北帝国大学の河野義禮先生が研究論文で、それを翡翠と鑑定された。

これを契機として列島で原産地が確認された。その後、縄文時代に富山県朝日町や新潟県糸魚川市で翡翠製品が盛んに製作されていたことを示す遺跡が次々と発見された。朝日町の境 A 遺跡では、未成品等が 1 万点以上見ついている。また、列島から出土する翡翠製品を化学分析すると、その 99% 近くが糸魚川の遺跡から朝日町の境 A 遺跡にかけての、いわゆる翡翠文化圏で生産されたものであることも分かった。

5. 翡翠製品の用途の変遷

縄文時代前期の後半には、玦飾の素材にそれまでの滑石や蠟石に加えて、格段に硬い石である軟玉（ネフライト）や蛇紋岩が用いられるようになった。これらの素材は、翡翠と同じ地域や岩脈に産出する。玦飾を製作していた遺跡に最初の頃は、翡翠は硬いので石斧などの加工具（ハンマー・ストーン）として持ち込まれていた。やがて翡翠の美しさに気付

いた縄文人は、それを加工しようと、挑戦が始まったと考えられる。縄文前期後葉の新潟県柏崎市の大宮遺跡や富山県朝日町の柳田遺跡からは、僅かではあるが列島最古の翡翠加工品が出土している。

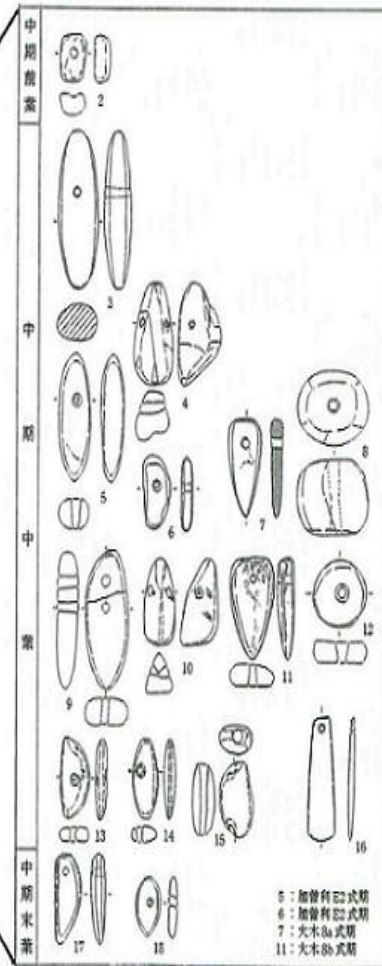
また、縄文中期に製作された翡翠の硬玉製大珠が、富山市大山町や南砺市上梨の遺跡、氷見市の朝日貝塚（出土品は全長 15.9cm、日本で3番目の大きさ）から出土しており、その主な製作遺跡として新潟県糸魚川市の長者ヶ原遺跡と寺地遺跡、富山県朝日町境A遺跡などが知られている。また、境A遺跡では、翡翠の石塊の両端を尖らせ、ダイヤモンド形大珠といった愛称で呼ばれるものも製作された。この形の大珠は境A遺跡のブランド品と言ってよいだろう。

翡翠製大珠には奇麗な孔が開いているが、孔を開けるには、細い矢竹のようなものを持って、水と砂をかけながら、手でもんだり、弓錐でもって穿けていくという根気の要る作業を要したと思われる。大珠は、北は北海道の礼文島から南は九州の鹿児島にまで分布しており、陸伝いに伝わっていったものもあるだろうが、その多くは生産地からまとめて舟で運ばれたと思われる。また、その出土状態を見ると、現在、考古学界ではペンダントだと説明しているが、両手の間に挟んだ状態で見つかる例もあることから、亡くなった人を悼み、黄泉の国に送る儀式や、遠くの人への贈与品としての用途も考えられる。

北陸の縄文人は、富山県と新潟県の境の地域で翡翠などの装身具を盛んに生産し、縄文時代の装身具文化をリードしていたことが明らかである。私は、その研究は日本海地域の先史・古代の地域性や文化を明らかにすると同時に、縄文人の知恵やエネルギーを学ぶことでもあると思っている。

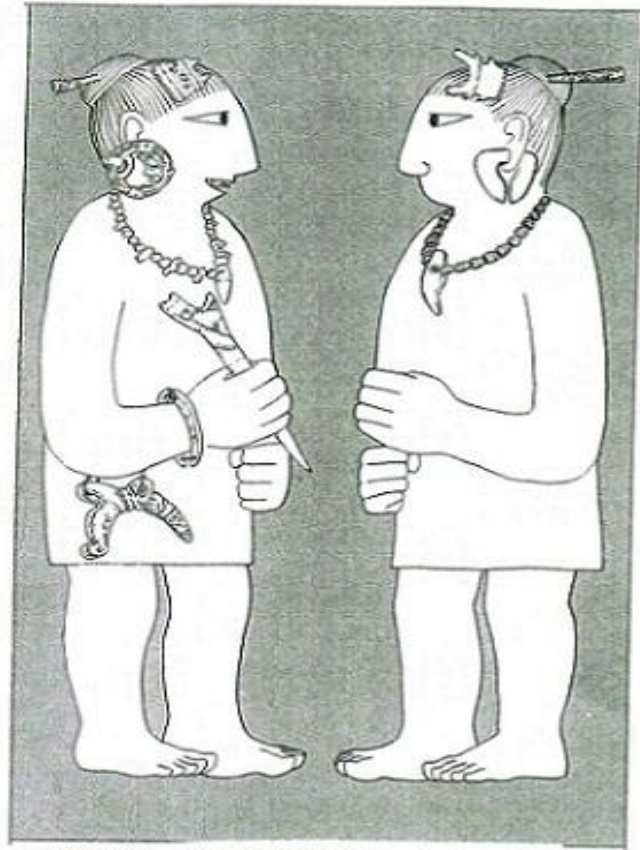


第 1-1 図 玉の形と移り変り (富山県埋文『ひさい』1987)



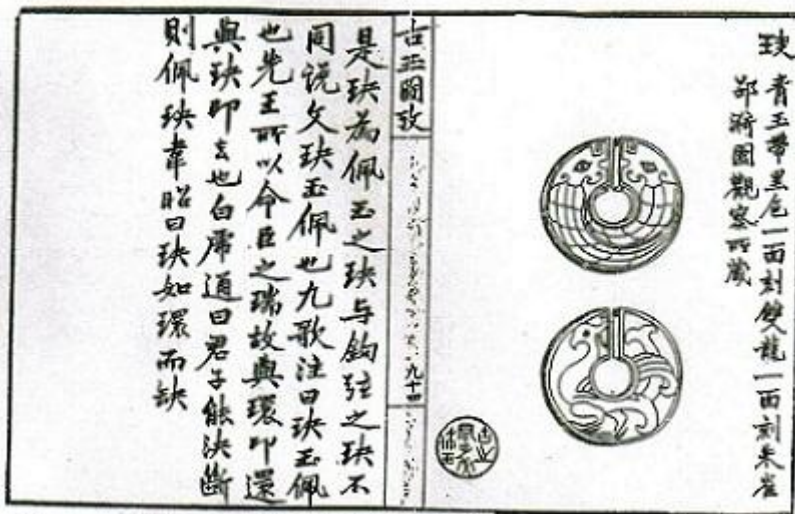
第 1-2 図 翡翠製大珠の編年

(青森県郷土館『火炎土器と翡翠の大珠』2001)

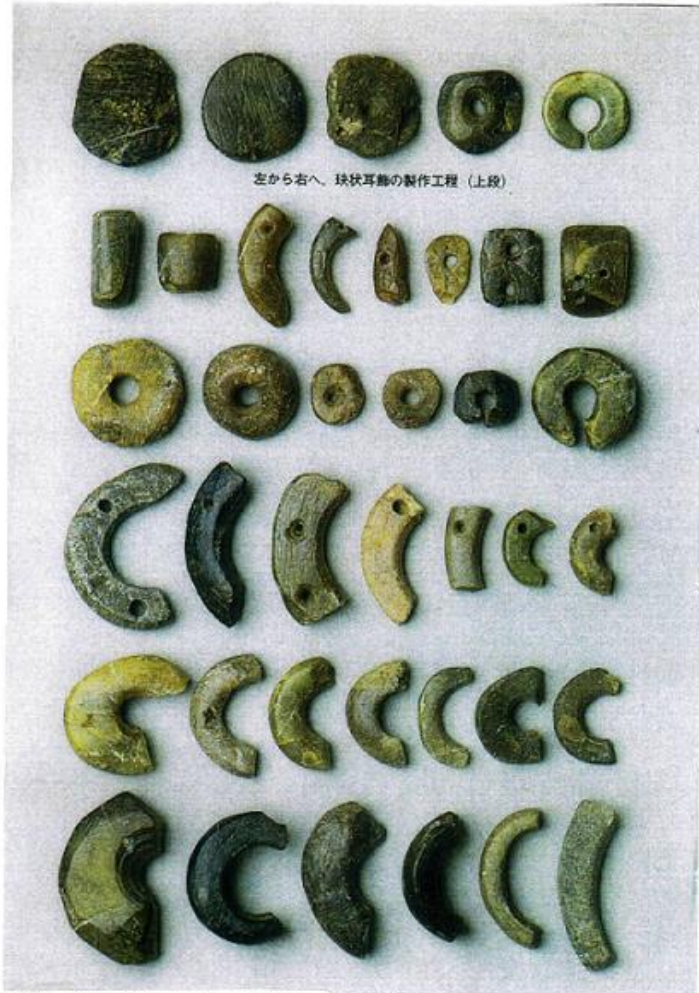
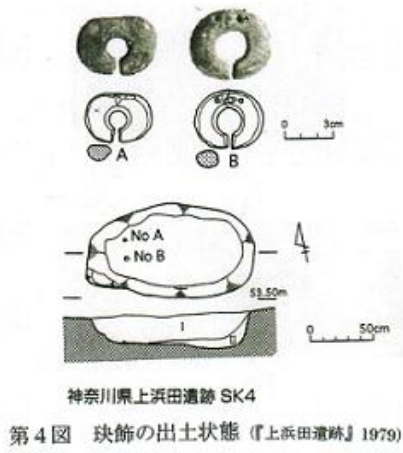


装身具変遷絵図

第 2 図 縄文時代装身のイメージ図
(町田章『装身具 1979』)



第 3 図 「玳」の考察 (『古玉圖攷』)





珠状耳飾りの製作遺跡の分布

- 1 甲・小寺遺跡(石川県) 2 極楽寺遺跡(富山県) 3 明石A遺跡(富山県) 4 川倉遺跡(新潟県) 5 舟山遺跡(長野県) 6 女犬原遺跡(長野県) 7 一津遺跡(長野県) 8 上原遺跡(長野県) 9 有明神社遺跡(長野県) 10 大宮遺跡(新潟県)

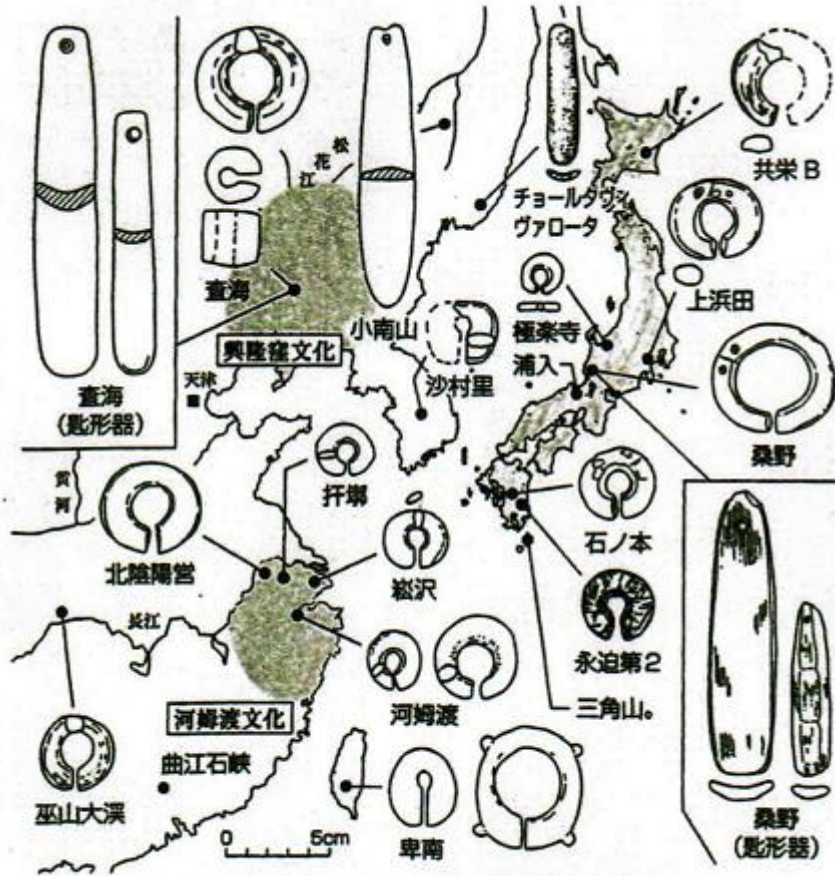
第6図 珠飾の製作遺跡の分布 (藤田『縄文再発見』1998)

年代(年前)	中国大陸			日本列島	
	区分	燕北(東北)	長江下流(江南)	縄文時代	(装身具の変遷)
1,200年前	新石器時代 前期	前半		草創期	珠状耳飾 へら状垂飾 硬玉製大珠 「の」字状石製品 指輪状石製品
8,000		後半	興隆窪文化	早期前半	
7,000	新石器時代 中期	前半	趙家溝文化 河姆渡文化 馬家浜文化	早期後半	
6,000		後半	紅山文化前期 崧沢文化	前期前半	
5,500	新石器時代 後期	前葉	紅山文化後期 良渚文化前期	前期後半	
5,000		中葉	小河沿文化 良渚文化後期	中期前半	
4,500		後葉		中期後半	
4,000					

文化期対比表と列島の装身具の変遷

(中国大陸は、「世界の考古学 中国の考古学」同成社に依拠して作成した。文化期ゴチックは本稿関連。)

第7図 (藤田作成)

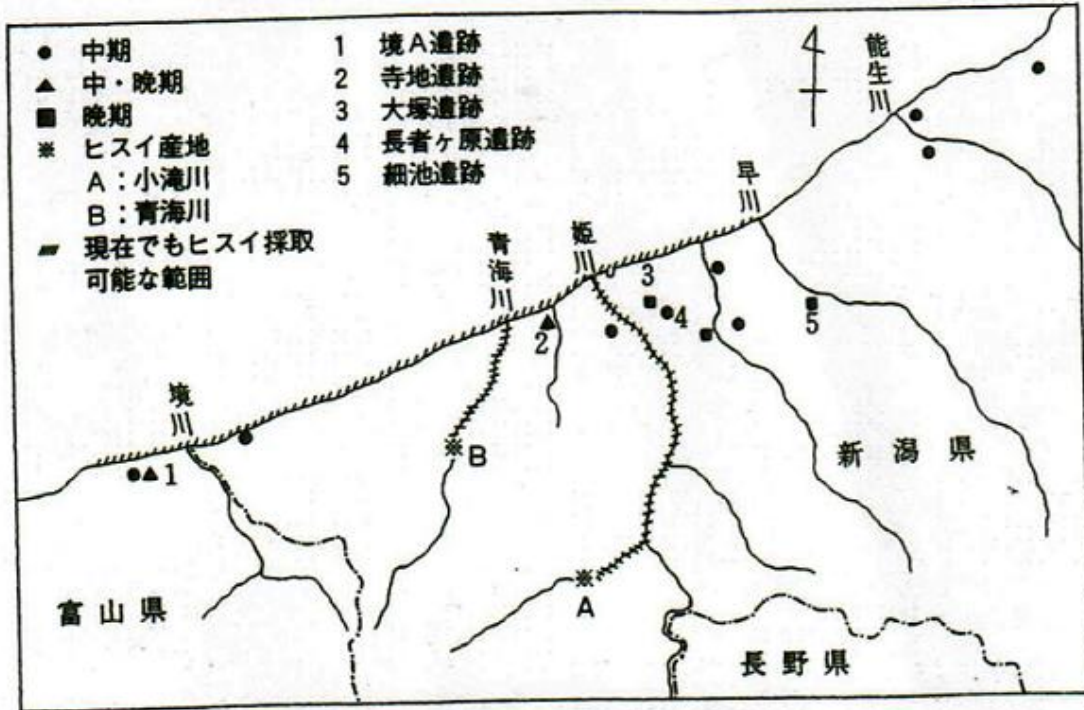


第 8 図 東アジアの玦飾と匙形器の分布
(藤田作成)



13 硬玉製大珠 氷見市朝日貝塚 縄文時代
中期 長さ15.9cm

第9図 朝日貝塚の硬玉製大珠(実物大) 氷見市。縄文時代中期のもの。緑と白色が混ざりあった色合いの硬玉(ヒスイ)が使われており、縷節形を呈する。中心に紐を通す穴が開けられている。長さ15.9cm、重さ470gで全国最大の大珠。国指定重要文化財。湊見氏蔵

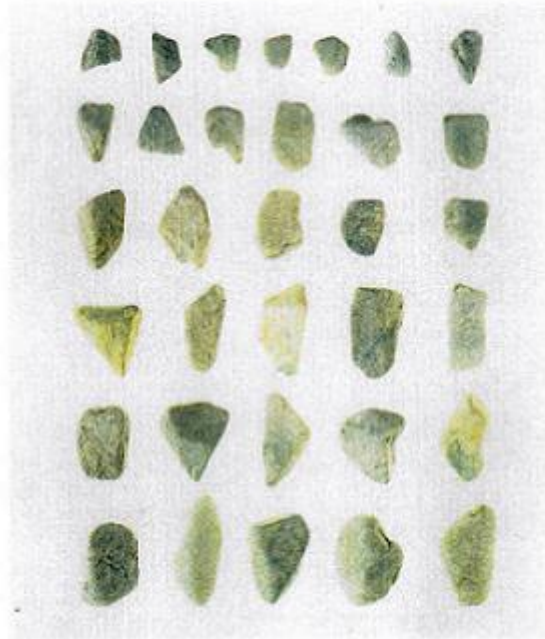


第 10 図 縄文時代における主要なヒスイ製品製作遺跡
(木島勉 1991 年より)

富山県朝日町境A遺跡



富山県朝日町境A遺跡



97：翡翠原石、重要文化財
境A遺跡、富山県埋七



98：翡翠原石、重要文化財
境A遺跡、富山県埋七

第 11 図 境A遺跡の翡翠製大珠と未成品（青森県郷土館『大炎土器と翡翠の大珠』2001 ほか）

記号	解 説
◇	小湊附近硬玉 原石産地
×	硬玉製丸形型 大珠出土遺跡
才	硬玉製線跡大 珠出土地
+	硬玉製木盤形 玉出土地
⊙	硬玉製筒形大珠 出土地+製品
▲	北伊豆産翡翠 原石産地
△	北伊豆産翡翠石 の石類出土地



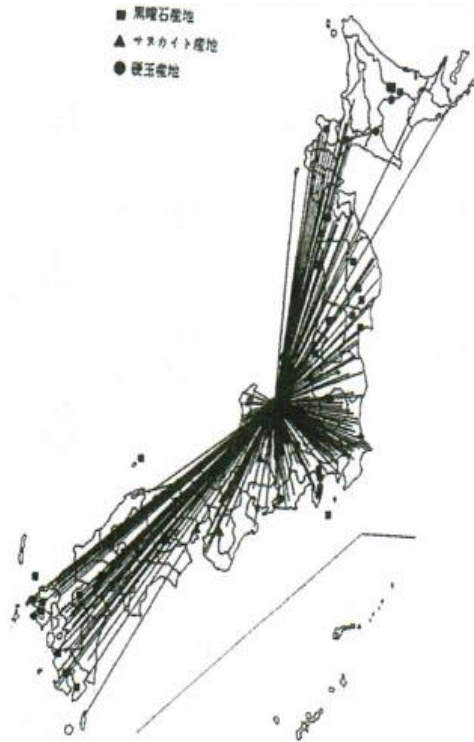
第一図 東日本の硬玉大珠出土遺跡分布図

①同心円的分布論図（江坂1957）



②拠点遺跡と分配論図 (栗島1985)

ヒスイ玉の様々な分布図



③物流論図 (宇野1998ab)

第 12 図 (藤田『日本海学研究叢書 縄文時代の生産と交流』2001)